

子規會誌

武知 五友 評伝 資料 (七)

「子規いろはかるた」 制作 余話

子規と勝田主計 — その関係資料の寄贈について —

「不去庵記」 について

越智 二良 遺稿集補遺 (二)

谷 光隆……………一

市村通泰……………一〇

和田茂樹……………一九

足立修平……………二三

……………二六

五四号
七平成四年
 月

例 会 記 録

三月例会 (第五九〇回)

平成四年三月十九日 (木) 正宗寺本堂 出席

二十九名

浦屋副会長司会により開会、和田会長あいさつ
のあと講演。

講演「天田愚庵のうた——愚庵居のころ——」

越智 通敏

四月例会 (第五九一回)

平成四年四月二十九日 (水) 子規記念博物館

参加八十七名 (内会員五十名)

総会を開き、会長あいさつ、渡部満泰幹事による
事業報告並びに収支決算報告の承認、平成四年
度収支予算案の承認。

記念講話は子規博の特別企画展記念講演に台流。

なお、総会にさきだち役員会を開催して総会提出の議案、ならびに会員増加のための対策について協議。

記念講演「霽月と子規・漱石」

会長 和田 茂樹氏

五月例会 (第五九二回)

平成四年五月九日 (土) 正宗寺本堂 出席

三十名

浦屋副会長長の司会により開会、越智二良前会長の遺稿第二集「草愁」など——越智二良創作集について紹介。つづいて講演。

講演「霽月と虚子・漱石」

会長 和田 茂樹氏

終わって役員会を開催。

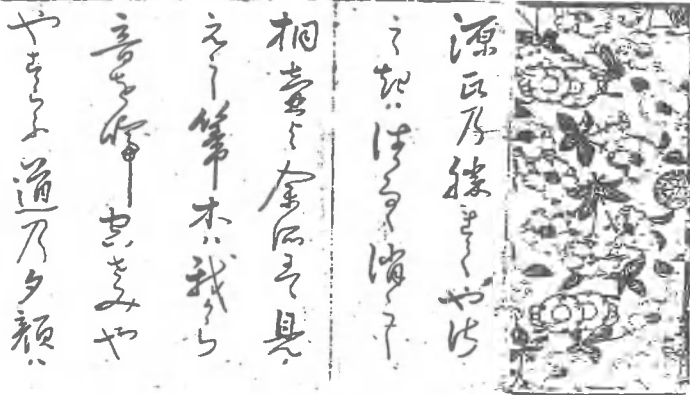
武知五友評伝資料(七)

四十二手習本 其の一

笠岡 金平靖恵氏藏

五友が諸芸の中でもとくに書に勝っていたことは周知の事実である。河東静溪は「翁、又た才去に富み、詩文書画、及び国風・篆刻・茗飲の技、其の流に涉らざる莫し。而して書は尤も雅勁、人争いて之を求む」(資料十二)といい、内藤鳴雪は「私は武知幾右衛門(号は愛山又五友)と云ふ人の手習所へ入門した」(資料二十三)といい、子規は「先生学は程朱を主とし傍ら諸技を修す 而して臨池と鉄筆とは尤其長する所なりと云ふ」(資料二十七)といい、三並良は「漢学者で書をすくした武智五友先生は、廃藩後帰農して、松山在の農村に居たが、松山に出ると観山先生の許に滞在して居て、我々に手本を書いてくれた」(資料二十四)という。そこで、ここでは五友の書いた手習本について一、二の実例を挙げてみることにする。筆者が五友の手習本として確認しているものは、岡山県笠岡市在住の金平靖恵氏が所蔵されているものである。それは優雅な桜模様と鼓と御所車をあしらった表紙で装丁された折手本で、一折は縦一九・四センチ×横七・九センチ、墨付の部分は三十七折であり、そ

谷 光 隆



手習本 其の一(冒頭部分)

の本文は次の如くである。
(傍線筆者)

源氏の勝れてやさしきハはかなく消し桐壺と余所にて見えし簾木ハ我から音を啼空せみややすらふ道の夕顔ハ若紫のいることにほふ未摘花の香ニ錦と見えし紅葉の賀風をいとひし花の冥結ひ懸たる葵桐の枝ニおく霜ハ花ちる里の時鳥須磨のうらみに沈みにししのひつたふ明石かた

頼ミし跡の標^ししけき蓬^し露^ふかし水に関^やの影^うつし知らぬ^絵面^{しろ}るや宿にたえせぬ^まつ風^もものうき空のうす雲^よに世は朝かほの花の露ゆかりもとめし乙^子女子か懸つ、結^ふ玉かつら芳たき春の初^子日ひらける花に舞^蝴蝶^深きおもひの螢^ここそ園なつかしき常夏や遣水涼し篝火の野分のかせに吹迷ひ日かけ曇らぬ御幸には花もやつる、爾^ま木の柱は忘れしをる梅^か枝^ににはほふ宿解にし藤のうら葉^{かな}何とて摘^し若菜^{にも}森のかしは木檜の葉と横笛のねも面白や宿の鈴^蟲こゑもうくらき夕きり秋ふかき御のり悟りしいその海まほろしの世の程もなく雲かくれにし夜はの月さくにもかをる兵部^御うつらぬ紅梅^{いろ}深し忍ふ、しなる竹川を渡るハ嬉しはし姫ののかれはてにし椎^か本^共に結^ひし総角^ハはるをわすれぬ^きわらひも本のいろなるやとり木や宿りとめにしあつまや二日夜なかめの尽しなう浮舟の世とやさらしな波の蜻^蛉さくからをおのかす^さみの手^習ハはかなき夢の浮橋をおもひ渡りてつきしなき浜のまさこをかきそあつむる

明治三年といふとしのきさらき廿日はかりしるす

清風

即ちそれは、「桐壺」「帚木」「空せみ」「夕顔」「若菜」「未摘花」……と『源氏物語』五十四帖の帖名を順次詠み込んでいったもので、『源氏物語』の諷^{ふじ}諷^ぶ文とか巻の名^しと呼ばれるものであるが、表紙の御所車は一に源氏車ともいうから、或いはこれに因んで書かれたものであるかもしれない。明治三年の二月廿日にしるしたといえは五友五十五歳の筆である。所蔵者の金平靖恵氏は、五友

の嗣子戀の合孫で、住友衛氏の合妹に当たる。その母堂^敬敬^志志^子刀自(戀の三男^み粒^{のり}の妻)の言によれば、これは習字のお手本に使うようにと書かれたものである由。書体は行草を交えているが、私はこちらではその結体よりも用筆の特徴、すなわち、筆画そのものが素麵のように細い線であることに注意しておきたい。

四十二 手習本 其の二

尼崎 住友衛氏蔵

次に住友衛氏所蔵の遺墨中にも恐らく手習本であつたらうと思われるものがある。それは現在では縦一九・五センチ×横七・九センチの断簡五片(A・B・C・D・E)となつてはいるが、もとは何かに貼つてあつて、それを剥がし取つたものらしく、文字は左右が逆で紙背より見る形となつてはいる。そして、Aには「孝」、Bには「力」、Cには「興」、Dには「温清」、Eには「命」の字が字画の一部を欠きながらも読み取れる。そこで、それに二工夫を加え、AとBを相接し、AよりBを五センチ下げてみると、写真のように「孝」の字がほとんど完全に復元でき、また、CとDを相接し、DをCより五・五センチ上げてみると「清」の字の傍の部分の一部補足される。つまり、もともとはAとB、CとDはこのような位置で連続していたものに相違ない。そして、「孝」の字を例にとると、その大きさは縦一二センチ×横七・五センチで、手習本としてはまさに恰好のものである。

然らばこれらの文字あるいは語句は、抑々いかなる古典に關係をもつものであるか。それについてまず注目されるのは「温清」の一語で、それは『礼記』曲礼上に、

凡為人子之礼、冬温而夏清、昏定而晨省。

とある所から来ていることは疑いなく、この文は『小学』の明倫篇にもそのまま引用されている。しかし、『礼記』や『小学』では、このほかの文字「孝」「力」「命」「興」との關係を合理的に説明することができない。そして、これを説明できるのは周興嗣の『千字文』である。『千字文』は四字づつで一句を成し、その句数は二百五十で、合計千字となるが、その中に、

A 孝当竭力。 忠则尽命。

孝は当に力を竭すべく、 忠には命を尽せ

とあり、すぐこれに続いて、

B 臨深履薄。 夙興温清。

深きに臨むごとく薄きを履むごとし 夙に興きて温清にす

とある。『千字文』は中国でも日本でも伝統的な識字の教科書であり、習字の手本でもあるから、この点から言っても全く問題がない。そこで、念のために岩波文庫本（山田準・安本健吉註解）によってこれに解釈を加えると、Aについては、

父母によく事へまつりて、鞭背せられたる大恩を報ゆることは、子たる者の必ず為すべき常道なれば、あらん限りの心力を尽して、孝養を致すべく、さて又君によく事へまつるには、骨を粉にし身を砕くことをも、つゆ惜しまずして、一身を君に捧げ、

誠志を致すべしとなり。

とあり、Bについては、

この節は上文をうけて、孝子の心がけをのべたるなり。凡そ人の子たるものが、父母に事ふるには、この身は父母の遺体なれば、少しも傷けざるべく、少しも辱をうけざるべく、決して父母の体面を汚すことをせざらんと、謹み恐れて、一言一行も忽にせぬ有様は、恰も深き淵の岸に出かゝり、又薄き水のうへをふまへ居て、もし一足あやまたば、不測の水底に陥らんとする時の如き心持にて、何事をするにも、決して粗忽なることなし。されば朝は早くより起き、夜はおそくまで、誠実に父母に事へ、寒き時は寝床を温め、或は帛を衣せなどして、親の身体を暖にし、暑き時は枕辺を搦ぎ、或は涼しき処に居させなどして、親の身体を凌ぎよく為となり、夙興の二字に夜寐の意をこめ、温清の二事を挙げて定省などの事をかねたるなり。

とある。孝道を最も尊んで自らも模範的に実践した五友であつてみれば、これは全く彼に相応しい手習本であると言えよう。そして、その書体は楷書または行書であるが、私は、ここでもその筆画が針金のように細い線であるのに注目するのである。

それから、ここでもう一つ言っておきたいのは、松山市大手町の妙円寺境内にある五友の父武知朴斎の墓である。その墓石には「武知朴斎府君墓」とあり、背面には「文久二年壬戌八月北五日歿」とある。「府君」という語は、亡父の尊称として用いるのが最も一般的な例であるから、恐らくこれは五友の筆になつたものであるう。



父朴斎の墓

それは後漢の曹全碑を思わせるような流麗な隷書で、先の手習本と共通する所はやはり柳条のように伸びた筆画である。五友の書にはこれと別体のももあるにはあるが、総じて瘦長勁逸の筆致は彼の書風の第一の特徴であると言つてよい。

ところで、子規と五友との関係は、手習を通じての関係が最も直接的であるから、最後にその点について考えてみる。子規の書にもいろいろ変化はあり、柴田膏曲氏などは晩年の筆跡に愚庵の影響が認められると言っているが(『子規居士の周冊』)、私は、太田正躬氏が終生五友の書風が残っていたとするのを重視したい(『子規言行録』)。「正岡常規又ノ名ハ處之助……」の神道碑銘、「糸瓜咲て……」の辞世三句、それから本誌の「子規会誌」という集字の題簽など、いずれもその筆致は瘦長勁逸というに相応しく、太田氏

の言は決して失当ではない。五友の書風と子規の書風と、それは見様によつては「貫く棒の如きもの」である。

〔追記〕 重川家俊氏は五友の手習本について次の如く述べられている。

習字の手本は一般的なものにあわせて自身の人生観や体験をもとにした綱領を書いて渡した。(現在上高柳に「抑人として幼稚の時より先ず読書算術之修業可為肝要……」の手本が遺つている)。

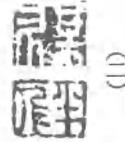
(『松前史談』第二号、松前町人物誌(一)武知五友)

四十四 印章八種

- (一) 「清風」 縦一・四センチ×横一・二センチ
 - (二) 「樸」 「伴」 縦〇・七センチ×横〇・九センチ
 - (三) 「化外頑民」 縦一・三センチ×横一・三センチ
 - (四) 「七十頑老」 直径三・八センチ
 - (五) 「文化丙子四月朔信」 直径三・八センチ
 - (六) 「臥南」 「山人」 縦一・三センチ×横一・三センチ
 - (七) 「省任」 縦二・一センチ×横一・四センチ
 - (八) 「毘老」 縦一・九センチ×横一・二センチ
- 五友は篆刻を能くした。三並良も「或は印を自分で刻して観山先生を病床に慰めたりした」(資料二十四)といい、子規も「臨書と鉄筆とは尤其長ずる所なりと云ふ」(資料二十七)といっている。



(一)



(二)



(三)



(四)



(五)



(六)



(七)



(八)

原 寸 大

目に触れた八種類を原寸大で掲げた。右のうち(一)〜(六)は落款印であり、(七) (八)は関防印である。以下、その印文について見てゆくことにする。

(一) 「清風」

この雅号は、蘇東坡の前赤壁賦にある「清風徐來」より採ったものである(資料二註②)。

(二) 「楝」「伴」

楝は、梅に同じ。伴は、侶。つれ。ともがら。「佩文韻府」には「梅花伴」の語が見え、その出典として吳景季旅夜詩の用例を挙げ、「須信故園痛去好——相——竹平安」とある。五友は梅を愛し「梅外」とも号した(資料十九・二十)。また、辛未元旦の作に「世態人情共競新。以時為字報昏晨。風華節物猶依旧。我与梅花迎早春」の詩もある(「松前史談」第二号)。

(三) 「化外頑民」

「化外」は、王化の及ばない外国。天子の政治・教化などの影響力の及ばない地域。「頑民」は、「書経」多士序に「成周既成、遷殷頑民。(成周既に成り、殷の頑民を遷す)」、また同書、畢命に「毖殷頑民、遷於洛邑。(殷の頑民を懲み、洛邑に遷す)」とあり、旧俗を慕って新しい政事を悦ばぬ人民。昔からの習慣や生活をがんこに守って、新しい政治を喜ばない人民、の意である。

詩・書・画とあわせて篆刻をも能くするのが中国では文人たるもの必須の条件とされるが、してみると五友は真に文人たるの資格を有していたといえる。彼の用いた印章は恐らく彼の自刻であったろう。そして、それにどれ程の種類があったかは、五友の印譜というものがないのでこれを知ることができないが、ここでは僅かに私の

(四) 「七十頑老」

齡七十に達してからの刻印に相違ない。「説文」では、七十を老と曰い、八十を耄と曰い、九十を耄と曰い、九十を耄と曰い。

(五) 「文化丙子四月朔信」

(五) は (四) と全く同じ大きな田印で、(四) が白字であるに對し (五) は朱字であり、兩者は一對として使用される。五友は文化十三年(丙子)四月朔日の生誕で、(五) の印文はその誕生日を意味する。「信」は印信(はんこ)の意。

(六) 「臥南」「山人」

「臥南」が朱字、「山人」が白字で、「臥南山人」の号を二印に分刻したものである。五友の明治十九年六月七日の白鹿洞書院掲示暗写日課には、その末尾に「郡中僑居臥南精舍」とあるから(住氏所蔵遺墨)、郡中の僑居はその室名を「臥南精舍」(精舍は、学問をおさめる所。生徒を教授する所。学舎。塾。書齋)と言ったのであり、「臥南山人」はこれと一体のものである。そして、彼の作った「寄寓西沼寺謝和田生恵可漏」と題する詩に「掃臥南山避世譚」の一句がある所からすると(『松前史談』第二号)、「臥南」とは「臥南山」の意であろう。南山は南の方角に見える山であり、五友の自詠絶句に「南山独秀青雲外」とあるのは、郡中の僑居より眺めた窓外の景色である(資料三十九)。そして、さらに言えばそれは、かの有名な陶淵明の飲酒の詩「結廬在人境。而無

車馬喧。問君何能爾。心遠地自偏。採菊東籬下。悠

然見南山。山氣日夕佳。飛鳥相与還。此中有真意。

欲弁已忘言」に胚胎するもので、衣冠を擲って世外に優游する五友の胸臆を言葉に託したものがこの「臥南山人」の雅号である。

(七) 「省任」

「省任」の二字は、これを一語として解することが難しい。卑見によれば、これは一字づつ分けて考えるべきもので、「省」は『論語』学而篇に「曾子曰。吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。与朋友交而不信乎。伝不習乎。」とあるその「省」、「任」は、同じく『論語』泰伯篇に「曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道远。仁以為己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。」とあるその「任」と考えるべきかと思う。共に『論語』の中にあり、しかも共に孔子の直系曾子の言であり、意味の上からも連絡がある。そして、忠(心の誠意)と信(ことばの誠意)を日々反省し、仁道の達成を己の任務とするのは五友の生き方そのものである。関防印は、一般に、本人の信条、理想、願望、嗜好などをあらわす語句を用いるので、本人の意思なり性向なりを窺うには実に恰好の材料である。五友の関防印「省任」は、この意味からしてまことに意義深いものであると言えよう。

(八) 「耄老」

「耄老」とは、言うまでもなく七十七歳の意である。この印は後

出の資料四十八「壬辰仲秋念三赴上灘途中口占并高岸楼上作」に捺
されているもので、末尾の落款に「七十七老徐来居士清風」とある
のと前後相呼応している。すなわち、この関防印は、五友の最晩年
に用いたものである。

四十五 逸 題 (原漢詩)

如鏡稿所収

頑雲 散じ尽して 海天空し
布帆 ① 半夜 春風に駕す
篷窓 ② 酒を傾けて 明月に酔ひ
十里の 播洋 ③ 一睡の中

註

- ① よなか。夜半。
- ② とまを懸けた舟のまど。船窓。
- ③ 播磨灘。瀬戸内海の東部、東は淡路島、西は小豆島で限られ
た海域。姫路沖の家島諸島を除けば島はなく、明石海峡、鳴門
海峡、備讃瀬戸でまわりの海域と結ばれる。

『如鏡稿』は、五友が慶応四年紀州に使いた時の紀行文で、本
詩はこれに付された門生由井清の跋文中に見える。由井は五友の嗣
子武知戀の依頼を受けてこれを書いたので、その文には、

(前略) 予受けて之(『如鏡稿』)を読むに、当時、先生と一篷

の中に起臥し、詩酒談笑し、日夕興観するの状、恍として目前
に在り。先生と話すことを得ずと雖も、聊か以て自ら慰むる
に足るのみ。因りて憶う、先生と相与に播洋を過ぎるや、先生
詩有り、曰く、(原漢文)

とあり、続けて本詩を録した後、さらにこれに和した由井自身の詩
を付している。それは次の通りである。

篷窓東望水連天 十八灘頭一夜風

天曉始知来既遠 淡山翻影入舟中

四十六 逸 題 (原漢文)

筆者 蔵

余、喫茶を好むと雖も未だ其の儀を詳らかにせざるなり。余、之を
聞けり。茶の能たる、食を消し、① 氣を降し、血熱を清くし、情欲を
省き、之を喫するも毒ならざるなり、と。且つ余、徒らに其の味を
好まず、其の趣を喜ぶなり。其の室を模陋にし、其の庭を幽深にし、
② 洒掃潔清、瓶花爐香、送迎客を延びき、器は③ 髹漆を用い、莫は白楮
に止まる。軟飯薄酒、盤肴下物、物薄くして情厚く、④ 会数々にして
⑤ 礼勤るに、其の交わりや久しうして之を敬す。余、此の数件を喜ぶ。
故に之を稽みて措かざるなり。

壬午小満 ⑥ 郡中の橋居に書す。

五友居士清風

註

- ① 食物を消化する。
 ② かざりけなくいやしい。
 ③ 水を撒き掃でなく。掃除。
 ④ 竈は、竈の俗字。竈は、いしやき。質の細かく堅いやきもの。
 磁器。

⑤ 干して白く粉をふいた柿。『本草綱目』卷三〇、果部、柿の「集解」に、

〔時珍曰〕……生柿置器中自紅者、謂之烘柿、日乾者謂之白柿、火乾者謂之烏柿、水浸藏者謂之醃柿。……

とあり。

⑥ 盤に盛ったさかな。

⑦ 酒のさかな。酒を嘔み下さしめる物の義。

⑧ 久敬は、交わることが久しくて、益々其の人を敬うこと。『論語』公治長篇に「子曰、晏平仲、善與人交、久而敬之」とあり。

⑨ 明治十五年（一八八二）。

⑩ 節候の名。二十四気の一つ。陰曆四月の中。陽曆五月二十一日・二十二日頃。

⑪ かりずまい。寄寓。

原文は半紙一枚を二つ折にし、その表に楷書で書かれているが、本文の前に「廿有七歳孟夏写於郡中 久保南洲」の一行がある。

即ちこれは、明治二十七年の陰曆四月に久保南洲なる人物が郡中で書き写したというのであるが、当の人物について筆者は未だ知る所

がない。

四十七 夏月

筆者蔵

あをばよりいであをばにかたぶきぬ
 みるまにもるゝなつのよのつき 清風

博学で多芸であった五友は和歌（国風）をも能くした。しかしその師系、流派については詳らかでない。以下は単なる私の推測である。

幕末期の松山地方の歌壇に在っては、石井義郷と西村清臣がその双壁とされる。両者は共に文化九年（一八一二）の生まれで、五友より四歳の長であるが、その没年は義郷が安政六年（一八五九）で四十八歳であったのに対し、清臣は明治十二年（一八七九）で六十八歳であった。そこには二十年の差があるわけで、義郷の没後藩中の和歌に志す者はみな清臣を以て宗師とし、清臣には門人が甚だ多かつた。また、清臣は皇典国学にも精通していたので、明治二年（一八六九）に藩の職制が改革されて皇学所が設置されるとその教官になった。こうした経歴を見ると、五友も恐らくは清臣の影響を受けたであろうと想像される。

ところで、その師系、流派であるが、『愛媛県教育史 前篇』（

愛媛県教育会編 三四七―三五二頁)では石井義郷を小沢蘆庵系に、西村清臣を香川景樹系に入れている。しかし『伊予二百偉人略伝』(伊予史談会編)を見ると、石井義郷については「海野遊翁門下の俊才にして和歌を善くし」とし、西村清臣については「歌道を海野幸典に学ぶ(一説初め香川景樹に学ぶと)」とある。海野幸典(游翁)は小沢蘆庵の門人前場黙軒に歌道を学んだ者であるから、してみると西村清臣の師系、流派は蘆庵系・景樹系ということになるが、この二つの系統には一脈の連絡がある。

小沢蘆庵(一七二三―一八〇二)は江戸中期の歌人で、擬古派に對抗して自然な感情を平易な語でうたう歌人たご歌を唱道し、『古今集』を尊重した。香川景樹(一七六八―一八四三)は江戸後期の歌人で、蘆庵と同じく『古今集』を尊重し、なかならずその「しらべ」を重んじて「歌は調ぶるものなり、理るものにあらず」と主張すると共に蘆庵の「ただごと歌」の流れをくんで、あるがままの純粹感情を重んじ、幕末から明治初頭の歌壇に大きな影響力を持って主流派を形成した。『桂園一枝』は景樹の自撰歌集であるが、この歌集は古今調の流麗・優美な歌風を特徴とし、また人事につき時にふれたる独自の境地を用いている。

五友の歌風も大局的には以上のような流れの中にあるのであろう。

〔参考文献〕 『伊予偉人録』 愛媛県文化協会 昭和十一年。

『大百科事典』 平凡社 一九八四。

子規会叢書

既刊

『子規こそわがいのち』

越智二良随筆集

B6版 三四九ページ
一、八〇〇円 送料三二〇円

『草愁』など

越智二良随筆集

B6版 三五〇ページ
一、八〇〇円 送料三二〇円

郵便振替 徳島二一八六八

松山子規会

お問い合わせ

松山市岩崎町二一四―二二

渡部 満 泰

「子規いろはかるた」制作余話

市 村 通 泰

一 はじめに

「子規いろはかるた」を制作したのは昭和五六年、今から十一年以上前のことである。今年一月、松山子規会の例会でこのかるたについて話をする機会を与えていただいたが、制作当時の資料も多く散逸し、記憶も薄れ、我ながら心もとないままに思い出話として聞いていただいた。本稿はその拙い話をまとめたものであるので、いわば雑談の域を出ない内容となることをお許し願いたい。

二、「子規いろはかるた」制作の動機

松山に生まれ育ちながら、現代の高校生は子規のことを、子規の句や短歌を知らない、知らなさすぎる——というのが長年の国語の授業を通しての私の実感であった。教科書には必ず「俳句・短歌」の単元がある。その単元に入る前に、子規の句を知っているだけ書きなさいと用紙を配っても、ほとんどの生徒が一句も書けない。二、三句でも書ける生徒は稀である。小中学校でも中学校でも教わったはずである。寂しい思いがした。

子規の句や短歌を知らなさすぎるという実感とともに、現代の高校生は「自然」について関心が薄いという実感もある。

鶏頭の十四五本もありぬべし

という句を、「鶏頭の花を見たことがない」と言う生徒に鑑賞させることができるはずがない。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかさざりけり

この短歌の情景を絵にしてみなさいと課題にしても、「藤の花を知らないから描けません」と言う生徒が多いのが実状である。そのくせ、梅、松、桜、牡丹にあやめ、それから萩も知っているのと彼らは言う。何のことはない、「花札」で親しんでいるのである。

教壇でそういう生徒を相手に、他の俳人、歌人よりはずっと時間をとって子規を教えていた私であるが、昭和五年一月、十二指腸潰瘍を患って胃の切除術のため二カ月程入院した。その間二つのニュースを新聞で知った。一つは若山牧水の歌かるたが宮崎から発行されたこと。今一つは一年後の五六年四月に、松山市立の子規記念博物館が建設、オープンするという記事である。

すでに芭蕉の句のかるたも京都で出していた。生徒の実態とそ

ういうニュースが一つになって子規俳句のかるたを思いついた次第である。

いろはかるたで遊ぶのはたいてい幼稚園から小学校低学年の子供である。子供というものは一つの遊びを覚え、興味を持つと何度でも繰り返し返して遊び、時には相手をしてやる親の方が辟易するほどである。子規の俳句かるたがそういう子供の遊びになりえたら、子供たちはひとりでに子規の句を覚え、絵札に描かれるはずの動物にも植物にも親しみを感ずるようになるに違いない。そうしてまた成長するにつれて教材に出てくる俳句を抵抗なく学ぶことができるのではなからうか、そんな思いを抱いて私は退院したのであった。

三、選句作業の過程で

子規の句をいろはかるたにするとということは、句の頭の文字が四十八揃うか否かがまず問題であった。「い」も「ろ」も「は」もすぐに見つかるはず、はたして「る」「る」「ゑ」が見つかるか。子規博から『子規俳句索引』が発行されたのは、昭和五八年のことで私は子規全集に収められた二万三千余句を一挙ずつ調べていかざるを得なかった。

「る」が見つかって、かるたにできるという確信を得たのが五五年六月であった。

ちなみに『子規俳句索引』で調べてみると「る」で始まる句は九句、「る」は六十余句「ゑ」は三十余句もあった。私が全集から探した時点ではそんなに見つからなかったような気がす

る。「る」で見つけた句の中で、「留守……」というのはどうも絵になりにくい。後に残ったのは、

瑠理色の朝顔咲きぬ下圃
累々と柿たる、塀の上

の二句。後者には「柿」が出てくる。「柿」は「柿食へば……」を採るだらうからと、「下圃」が小学生には少し無理かなと思いつつ、結局、「る」では「瑠理色の……」を後日選んだように思う。

さて四十八枚が揃うとの確信を得て選句にかかったのであるが、選句上のめやすとしたのは次の三点である。

1. かるたぎして絵になりやすい句。
2. 小学生にも情景が理解できる句。
3. 人口に膾炙した句。

これに添って選んだ句をコピーし、いろは順に並べて原稿用紙に貼りつけてゆくと約二千句、これが第一次の選句である。

これから四十八句に絞り込む過程で、高浜虚子著の『子規句解』、明治書院の『近代俳句大観』、二、三の歳時記を参考とした。更に、「人口に膾炙した句」を求めて高校の国語の教科書の俳句の単元を開いてみた。その当時の抜き書きを失くしてしまっただので、現在の教科書に載っている子規の句を数社分紹介したい。所収句は十年前とほとんど変っていないようだ。

〔筑摩書房 新編国語一〕

○柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

○いくたびも雪の深さを尋ねけり

○鶏頭の十四本もありぬべし

○痰一斗糸瓜の水も間に合はず

〔尚学図書 国語Ⅰ〕

○いくたびも雪の深さを尋ねけり

○鶏頭の十四五本もありぬべし

○糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

〔大修館書店 新国語Ⅱ〕

○雪残る頂一つ国境

○鶏頭の十四五本もありぬべし

○赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

○いくたびも雪の深さを尋ねけり

○糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

〔右文書院 国語Ⅰ〕

○柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

○初芝居見て来て晴れ着未だ脱がず

○汐干より今帰りたる隣かな

○いくたびも雪の深さを尋ねけり

○糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

教科書所収句で見る限り、「柿くへば……」「いくたびも…

…」「鶏頭の……」そして絶筆三句中の一句と合わせて、この

四句がいわば子規句二万三千余句の代表句の観がする。

前記三つの選句のめやすの外に次の五つを二次選句の留意点

とした。

1. 子規の足跡がある程度わかること。

2. 季のバランスを考へること。

3. 動物・植物は子供が知っているもので重複しないこと。

4. 作句年次が著しく偏ることのないようにすること。

5. 松山を詠んだ句を多くすること。

こうしてあれこれ迷いながら四十八句の選句を終えたのは五年十二月のことである。以下にそれを列挙する。表記は講談社版子規全集に依る。

社版子規全集に依る。

◎い いくたびも雪の深さを尋ねけり

ろ 爐塞いで書讀む夜の地震かな

◎は 春や昔十五万石の城下哉

に 雞の親子引きあふ落穂かな

ほ ほろ／＼とひとりこぼるる櫻哉

◎へ 糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

と とまらんとす蜻蛉に動く芒哉

ち 血のあとの苔ともならで春の雨

り 林檎くふて牡丹の前に死なん哉

ぬ 塗りかへて暑き色也仁王門

る 瑠璃色の朝顔咲きぬ下圃

を をかしうに出来てかゞしの哀也

◎わ 若帖の二手になりて上りけり

◎か 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

よ 夜の雪やせわしく叩く醫者の門
 た 蒲公英やローンテニスの線の外
 れ 蓮花草我も一度は小供なり
 そ 漱石が来て虚子が来て大三十日
 つ 燕の物くはへ来る晝餉哉
 ね ねころんで書よむ人や春の草
 な 夏草やベースボールの人遠し
 ら 蘭の香や女詩うたふ詩は東坡
 む 麥時や北砥部山の麓まで
 う うっとり人見る奈良の鹿子哉
 ろ ろもり浮いて鯉深く潜む秋の水
 の のら猫や思ふがまゝに戀ひわたる
 お 沖中や鳥居一つの冬木立
 く 句を聞すラムプの下や柿二つ
 や 遣羽子のちらく雪となりけり

◎ま 松山や秋より高き天主閣
 ◎け 雞頭の十四五本もありぬべし
 ふ 故郷へ入る夜は月よほとゝきす
 こ 子を負て子守鞠つく片手業
 え 椽端や月に向いたる客あるじ
 て 手の内に螢つめたき光かな
 あ 赤き薔薇白き薔薇皆さみだるゝ
 さ 賽銭のひゞきに落る椿かな

き 切れ風や道灌山を越えて行く
 ゆ 温泉の町に紅梅早き宿屋哉
 め めでたさも一茶位や雑煮餅
 み 水草の花まだ白し秋の風
 し しくるゝや弘法死して一千年
 ゑ 晝かくべき夏のくだ物何々ぞ
 ひ 一箱の林檎ゆゝしや冬籠
 も ものもいはで喰ひついたる西瓜哉
 せ 禅寺に何もなきこそ涼しけれ
 す すゝしきや嶋あり松あり白帆有り
 京 京に來て扇購ふいとま哉
 「いろはかゝた」では、「ん」の代わりに「京」を入れるの
 だと言われている。これで四十八句。い・ろ・はの頭につけた
 ◎印の七句は、「人口に膾炙した子規の代表句」として無条件
 に選んだ句である。このため私の好みで採りたかった「母と二
 人いもうとを待つ夜寒かな」「毎年よ彼岸の入りに寒いのは」
 などを割愛せざるを得なかった。その他選句の経過を記憶にあ
 るところで一部述べてみたい。例えば「あ」の句では、正宗寺
 で詠んだ「朝寒やたのもと響く内玄関」。これは絵になりなく
 い気がした。他に最後まで残していたのは、「朝顔や我に写生
 の心あり」「赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり」「秋の空物千卒の
 高さかな」「雨晴れて雞陽火の土を掘る」「栗の穂のこゝを叩
 くなこの墓を」「赤き薔薇白き薔薇皆さみだるゝ」である。こ

の内、「朝顔や」の句は子規文学の表現の核とも言える「写生の心」の語句に魅かれて採りたかったが、前述のように「朝顔は「る」で選ばざるを得ないからはずした。「赤蜻蛉……」の句もその音調も景も雄大なところから私の好きな句であった。

しかし、どうしても「赤き薔薇」の句にひかかってしまった。教員として新採の頃教材で扱った碧梧桐の「赤い椿白い椿と落ちにけり」との比較においてである。共に明治二九年の作である。「近代俳句大観」の中でも、「白き花赤き花秋立ちにけり(子規)」「柳桜柳桜と植ゑにけり(子規)」「赤い小鳥青い小鳥の小春かな(岡野知十)」「黒い牛赤い牛居る花野かな(石井露月)」等が類句として挙げられ、「当時はこういう単純明快な対照的叙述が、写生の一手法として流行した」と記されている。そういうところから結局、「赤き薔薇」を採ったのであるが、今でも「赤蜻蛉」の方がよかったかなと思ったりもする。

季や作句年次のバランスを考慮して割愛した句も多くある。次にこのかるたに選んだ句の季と作句年次を表にして示す。

次に、子規の足跡がわかるようにと、○○で詠んだ句、○○を詠んだ句、その地域別で示すと次のようになる。

松山 — は・わ・む・ま・ふ・さ・ゆ・み・し

宮島 — お

奈良 — か・う

京都 — 京

子規の年次別作句数		「子規いろはかるた」所収句					
明治	年 句 数	新年	春	夏	秋	冬	計
18	23		1				1
19	14						
20	55						
21	172						
22	163						
23	311						
24	577		1		2		3
25	3,121		2	2	1	1	6
26	4,812	1	3			1	5
27	2,645	1			1		2
28	2,894		2	1	3	3	9
29	3,250		3	2	2	1	8
30	1,542				1		1
31	1,468	1	2	3	1	1	8
32	948			1	1		2
33	691				1		1
34	529						
35	418			1	1		2
計	23,647	3	14	10	14	7	48

講談社 第三巻
子規全集 P. 732 より

松島 — す

中国 — ち・ら

上野(道灌山) — き

根岸 — い・ろ・へ・り・る・そ・く・け・め・ゑ・ひ

動物を詠んだ句では、鶏(に)・蜻蛉(と)・若鮎(わ)・燕(つ)・鹿の子(う)・るもり、鯉(ゐ)・のら猫(の)・ほととぎす(ふ)・蛭(て)。絵札にのみ登場するのは、からす(を)・蝶(は)・白鷺(み)ゆ。ほととぎすはもちろん俳誌「ホト、ギス」にもちなんだ選んだもの。

植物では、落穂(に)・桜(は)・糸瓜(へ)・芒(と)・林檎(り)ひ・牡丹(り)・朝顔(る)・柿(か)く・蒲公英(た)・蓮華草(れ)・春の草(ね)・夏草(な)・蘭の香(ら)・冬木立(お)・鶏頭(け)・水草(み)・西瓜(も)・松(す)・薔薇(あ)・椿(つ)・紅梅(ゆ)。そして絵札にのみ描かれたのは、彼岸花(ま)・

桃の実と枇杷(えびわ)。

おおむね、現代の子供たちが親しめる、あるいは知っておいてほしい動植物を選んだつもりである。

人物では、漱石と虚子(そ)・弘法大師(し)・一茶(め)・東坡(ら)が登場する。芭蕉は松島(す)の句に関連させて解説で登場させた。

また子規と言えば野球とも言われるところから、ベースボール(な)の句を。そして明治の時代には珍しかった「ローンテニス」(た)の句も選んだ。

発行後十年を経て、今一度「かるた」としての選句の様を振り返ってみると、やはり小学生には無理であったかなと思われる句が、数句あるが、今となっては致し方のないところである。

四、かるた制作上の工夫

1. 絵札について

昭和五年十二月に一応の選句を終えて、勤めていた松山工業高の美術科の教員である野村彰史氏に絵札を描いてくれるようをお願いした。子規の句自体を鑑賞の過程で生徒に絵画化させてみたことはあったが、美術の専門家が公に絵画化、それも「かるたの絵札」として描いた例はないことである。油絵が専門の野村氏も快く引き受けて下さった。四月の子規博オーブンに合わせたの発行としたかったので、四十八枚の絵は二カ月足らずで画してもらった。原画は、かるたの一枚の寸法を六×九センチと決め、この大ききで、台紙の色も生かし、白黒以外に六色の絵の具が使われている。子供が喜んで手にとって遊んで

くれるよう明るく楽しい絵にしてもらった。俳画の描き方を参考としたものでももちろんない。予め野村氏に句意を説明することもほとんどしなかった。あくまでも「子規の句を使った、子供の遊びとしてのかかるた」を念頭において、後は全て野村氏に任せたものである。絵札はかるたのとり札であるので、㊦、㊧、㊨の文字が要る。それは一般的には札の右肩にあるものであるが、彼は絵のデザインに合わせて、左肩にも右下にも、左下にも描いた。このかるたの特色の一つである。

絵札が五、六枚できたところで、子規博館長の和田茂樹先生(私の大学時代の恩師であり、当時は子規博開館準備で随分ご多忙の時期であつたらうと思われるが)に監修をお願いにお伺いした。以後発行まで、先生の御助言をいただいて選句の一部修正や解説文の表現等、一とおりならずご教示をいただいた。

二月中旬に絵札の原画は完成した。㊦の札「漱石が来て虚子が来て大三十日」の句が最も描きにくかったとは野村氏の述べである。とにかく四十八枚の原画を並べてみると実に壮観である。(印刷後発行されたかるたの絵は原版の色よりも少し異って渋くなっている。原画の方はこの度よみ札と共に額に入れて、子規博に寄贈して永く保管していただけることとなった。)

2. よみ札について

よみ札についても他のかるたにない工夫をいくつかした。まず句の漢字はすべて新字体に改め、よみがなをつけた。温泉↓温泉、雑煮↓雑煮のごとく。仮名は句の頭の「る」「る」「る」を「

の必要もあって旧仮名のままとした。(発行して一年後の昭和五七年三月二五日付の朝日新聞の投書欄に、「仮名の勉強は子規の俳句で」という二五歳の主婦の方の文があった。その中に「……子規いろはかるたなるものを買ひ求め、四歳の息子を相手にかるた取りをして遊んでいる。札を読んだり取ったりが私と対等にできるような息子には旧仮名づかいも正しく読めるように教えた。……字体や仮名づかいについても古い表記を特別視せず、気楽に読める子供に育ってほしいと願っている。」と書かれており、私の意を強くしてくれたものである。)

それから原作を、句の前書きのあるものはそれも添えて、子規全集の表記のとおりを、よみ札の左端に小さく記した。また作句年次を西暦と明治とで、そして季を下端に小さく横書きにして添えた。

3. 付録の解説について

付録として所収句の解説をつけた。当時までに発行されていたこの種のかかるたに、百人一首は別として、解説付きというものはなかったと思う。解説は、

① いくたびも 雪の深さを たずねけり 明治29年・冬

として始め、句は全て現代仮名遣いに改めた。小学生向きに、現代の子供たちが疎遠になりつつある自然や、子供たちにとつての遠い昔(明治という時代)について、また子規という人や俳句について、子供たちの理解が少しでも深まるようにという思いで書いた。その解説文はほとんどの句について27字×6行

にまとめた。やむを得ず字数をオーバーしたのが五句程ある。虚子との関係を説明した③の句、芭蕉のことを説明した④の句等である。また⑤の句の解説の後に、俳句の形式、季語、切れ字についての簡単な説明も加えた。

五、発行後の反響について

発行は地元の出版社、青葉図書で引き受けてくださった。当時の村上勉社長自らが原画を一枚一枚カメラに収め、印刷の色出しにも苦勞をされたようである。読み札、絵札とも印刷された用紙を厚紙に貼る作業は、地元では機械化できず、市内で襖貼り等を業とする表具屋さんに回されたので手間のかかる仕事となったようだ。

初版の千部が完成したのは、子規博のオープンとはほぼ時を同じくした五六年の四月初旬のことである。マスコミ各社も好意的に大きく取り上げてくれた。六月十八日には愛媛新聞のコラム「地軸」でも、「意表をついたアイデアの成功といえる……子規の名句を天然色の絵にした楽しさは、そのまま自分の想像すべき情景とたぶって心にとけ込み、心をなごませる」と評していただいた。

発行後の私の最大の関心事は、果して現代っ子たちがこのかゝるたで実際に遊んでくれるかということであった。そこで県内の、全校児童数十人以下の小学校の児童会宛に一部ずつ贈ってみた。児童数十人以下というのは、随分と僻地の小学校か、その分校で、県下に十校ほどあった。しばらくして次々にその児

童たちからお礼の作文や手紙が届いた。どれも素朴で心のこもった文面であった。西条市の高嶺小学校浦山分校の四年生の女の子からののがきには、早速学級会でかたるたとりをしたことが記されていた。相手は一年生の男の子、浦山分校は児童数わずかに二名、しかも二人は姉と弟なのである。北条市の沖合に浮かぶ島の安居島あらい小学校は男の子二人だけの学校。児童の作文に添えられた先生の手紙には、「その後児童と共に俳句のことや正岡子規のことを勉強しました。児童も俳句に対する興味を持ってきたようで、自分たちも作ってみようなどという意見も出ました。」と書かれていた。それから一年後の五七年四月二六日の愛媛新聞に「分校の春」という見出しで日振島小喜路分校の紹介記事が写真入りで掲載されていた。その記事の中にはもちろん子規かるたのことはひと言も触れられていないのだが、先生を囲んで全児童五名が遊んでいる写真が掲載されており、その写真の下に、「『ハイッ。』かけ声も元気に一番好きなかるととりをする喜路分校の児童たち」と説明があり、写真をよく見るとそれは紛れもなく一年前に送った私の「子規いろはかるた」なのであった。松山市内の小学校でも「昔の遊びクラブ」等を使っているという話も耳にすることができた。私は企画を思い立って製品化するまでの苦労が確かに報われたと思った。

発行直後、和田先生に「正岡家にもお届けするように。」と言われて、教えていただいた住所に手紙を添えて送らせていただいた。子規没後養子として嗣がれた忠三郎氏は既に他界されて

おり、その奥様から折り返し礼状をいただいた。その差出人の「正岡あや子」氏のことは私はその当時は忠三郎氏の奥様で正岡家を継いでいらっしやる方とだけしか知らなかったが、数年後、司馬遼太郎著の『ひとびとの聲音』を読んでその中に非常にしばしば登場する「あや子さん」があのだいたいた礼状の差出人と同一人物だと知り、当然のことではあったのだが、私は驚いてその手紙を読み返したものである。司馬氏はその本の中で、あやさんの字は決して上手な方とは言えないなどと書いておられたが、走り書きとも見える便箋二枚の手紙の字は私などから見るとなかなかの達筆で味わい深い字体であった。その「あや子さん」も最近亡くなられたと和田先生から一月の子規会例会のところに教えられた。『ひとびとの聲音』に描かれた「あや子さん」の性格からして、私がいちだいたいた礼状の文面、お言葉通りのお気持ちと受け取られ、また簡潔で過不足なく、しかも温かいお人柄が偲ばれる手紙であるのでここに原文のまま紹介させていただくこととする。

前略

留守中に思いがけない小包がとどいて居りました。開封して思わず歓声をあげました。「いろはがるた」とはすばらしいアイデアと存じました。選句も絵も小学生でも充分理解出来、拜見してとても楽しくなりました。先生の御苦労お察し申し上げます。ほんとにいいものをつくって下さいますと誠にありがとうございます。早速、霊前にそな

えさせて頂きました。

二日の記念館オープンの日は司馬さんと御一緒に貴地にうかがい、丁度満開のお城山にものほり、大変楽しい五日間をすごしました。時々これからも松山へまいる事があると存じますので、御差し支えない時に、御目にかゝり御礼を申し上げたいと存じて居ります。

御礼状がおそくなり申し訳けません。何卒お許し下さいませ。

四月二十九日 取り急ぎ御礼まで

正岡あや子

「早速霊前に……」とあるのはもちろん子規の霊前であろう。それまでの私には遠い遠い存在の子規であったが、そのことで一歩私は子規に近づき得たようなありがたい気持ちを感じたものである。

六 おわりに

『子規いろはかるた』を発行して十年。発行を快く引き受けて下さった青葉図書の前代社長もすでに他界され、十年前に礼状をいただいた正岡あや子氏もお亡くなりになった。

二年前前に北条市沖の安居島を訪れたときには、かるたを送ったあの安居島小学校は廃校となっており、二人の児童が遊んだのであろう狭い運動場の片隅に低鉄棒が赤く錆びついていた。あの四年生と一年生の姉弟二人が通っていた浦山分校も姉が卒業の年、たった一人の卒業式としてテレビで紹介されていたが

その四月からそこも廃校となるのだと報じられていた。まさしく十年ひと昔の感である。

子規は随筆「病牀論語」の中で、「教育には智育、技育、徳育、美育、氣育、體育あり」とし、とくに美育の必要性を説いている。「知・徳・体」は教育現場でもよく言われ、現代はまた知育偏重教育だとも言われているが、私は美育の必要性を痛感している。私の作ったかるたは今ではもう私の手を離れて一人歩きしている感じであるが、一人でも多くの子供たちの情操教育に、あるいは美育のために少しでも役立つてくれたらと今も願うものである。

平成四年一月例会

(松山工業学校教諭)

子規会叢書近刊

『しのぶ草』

——亡き妻を偲ぶうた——

越智二良遺稿集第三

松山子規会

子規と勝田主計

—その関係資料の寄贈について—

和田茂樹

子規より二歳年少の郷友勝田主計かすえあて書簡や、本人の日記・

句稿・著者など約六十点が、一月三十一日に松山市に寄贈され、各新聞に報道された。資料が多いので、主計の人がらや、資料のうち特色のある事項の一端についてお伝えする。なお詳細については全体の調査を待たねばならぬ。

〔一〕 勝田主計（明治二・九・五）昭和二三・一〇・二〇、80歳）

松山藩士勝田久廉の五男として、温泉郡（現松山市）御宝町に生まれた。明治十九年末上京、同二十年第一高等中学校入学。常盤会寄宿舎では、ベース・ボールの東の大関として認められ、子規と両軍の捕手として戦うなど熱中し、「芸くらべ」では成田屋の仮声うまく、西の関脇と番付に記されるなど、何をやってでも巧者なようである。

二十五年元旦試作の句を子規にほめられ、二十六年春からは「明庵」と号して、子規の新俳句運動に熱中し、作句数も多い。二十八年東大法学部政治科を卒業、大蔵省に入り、のち蔵相を再任、文相も務め、貴族院議員に勅選されるなど、要職を歴任した。

〔二〕 勝田龍夫と遺志による寄贈資料

勝田龍夫（明治四五・二・二二）平成三・五・二九、79歳）

は、主計の四男、日本不動産銀行、改め日本債券信用銀行の名誉会長。父主計の遺稿を整理し、「学生時代の父勝田主計と子規」（講談社版、子規全集第一巻俳句一〇月報、昭和50年12月）があり、『中国借款と勝田主計』（昭和47年9月刊、ダイヤモンド社）で父の業績についても紹介している。かねがねその遺稿類を保管し、子規記念博物館に寄贈したいと洩されていたというが、その志を果さず、昨年五月二十九日七十九歳で長逝された。

よって同行内で事後処理について決定され、十一月二十一日同行取締役岩城忠男（大洲出身）・多田井喜生の両氏来松され、次の資料類、計三十九点を寄贈された。

〔一〕 正岡子規の勝田主計あて書簡 明治25年10月3日(1)

同 明治25年12月3日(2)

同 明治26年2月13日(3)

同 明治27年4月11日(4)

同 明治30年3月9日(5)

〔二〕 勝田主計（明庵）俳句稿（旅中駄句） 一冊 71丁

(三) 内藤鳴雪の勝田主計あて書簡 一七点 (手紙一四、ハガキ三)

同 封筒のみ 三点

(四) 高浜虚子 七点

(五) 河東碧梧桐 二点

(六) 五百木飄亭 一点

(七) 寒川鼠骨 一点

(八) 写真ほか 二点

右のうち、子規書簡は講談社版子規全集第十八・十九巻に所載、いちはやく提供されていたからであろう。

(1) 子規は、大磯行きのため月謝納入方依頼している。

(2) 正月用の福引の依頼を天岸一順を通じて依頼をうけ、男女四五十人用の宝引を作つての送り状である。子規は「辻占」も苦心して集めて批評しているし、少年時代から謎作りを得意としているので、この福引が残つておれば面白いのだが、残念ながら一つも判明しない。

(3) 明治二十六年二月大学授業料納入にあたり、風邪で閉居中なので、鳴雪先生から不足分の五十銭を借用しての納入方を依頼、二十六年三月迄在学していた証となるであろう。

(4) 明治二十七年二月十一日「小日本」新聞を創刊。子規は編集主任として、文苑俳句欄に掲載するため俳句送付を依頼。

(5) 従弟藤野古白の遺稿を整理し、『古白遺稿』として出版するにあたり、応分の寄付を依頼、十五銭以上一円迄と金額をきめている。主計は一円寄付、現在古本相場は二十五万〜三十

万円の高価となっており、誰が苦笑しているであろうか。

(二) 俳句稿は、旅中の吟詠をまとめ、内藤鳴雪・藤野古白、子規の松山中学時代からの学友西原五洲などの批点がある。明治二十六年「旅中駄句」には子規の批点のみならず、主計についての人物評がある。漢文体なので、訓釈文としておく。

癸巳二月廿三日夜半病状援筆

附點畢んぬ

子規子安

明庵兄は多能の士也。泮水にありて経済学を究め、余力を以てて十七字を作る。才思煥発、筆力雅健、俳人墨客も且つ一見して舌を巻く。蓋し兄遠遊を好み、暇日有れば則ち山野を跋渉し、往きて故趾名勝を觀る。想ふに其れ江山の助けを得る者も亦多し。古来雅客と称する者は、西行の如く、宗祇の如く、芭蕉の如く、皆一生を南船北馬の間に送り、而して謂はゆる歌人俳諧師は、尽く是れ机上兵を談ずるの類のみ。吾兄に及ばざる者甚だ遠しと謂ふべき也。

子規再識

明治二十六年二月の時点での勝田明庵(当時の俳号、のちに宰洲と改める)の人物評である。泮水は諸侯の学宮、東京にあつて専攻の学問と同時に、十七字の俳句にも僅かの短時日であるが、「才思煥発、筆力雅健」で舌を巻くほどの上達ぶりである。それは寸暇を惜しんで山野を跋渉したその実感からの写真

であり、いわゆる歌人や俳諧の宗匠達は、机上で兵法を語るに過ぎない。君の足元にも及ばないといえようと、明庵の専攻の分野のみならず、俳諧にも鍊達の状況を述べたもので、子規の人物評として最初のものである。

もつとも、明治十七年には「郷党人物月旦評」や同十九年には「七変人評論」があるが、これは合評で、個人単独評ではない。

次に、鳴雪以下の俳人達からの書簡が多数あるが、虚子については、毎日新聞社版『高浜虚子全集』に四通掲載されている。鳴雪書簡は多いが、その他の人びとも、改めて述べることにしよう。

○平成四年一月三十一日、第二回めの寄贈

取締役若城忠男・多田井喜生両氏再度来松され、日本債券信用銀行取締役頭取松岡誠司氏から勝田主計の資料類二十点をまとめて、寄贈された。

- (一) 勝田主計 手帳 明治十九〜二十一年 一冊
 - (二) 宰洲旬日記 ノート 明治十九年・同二十二年 二冊
 - (三) 懐中日記 明治二十一〜二十七年 七冊
 - (四) 内藤鳴雪の勝田主計あて書簡 二通
 - (五) 放送原稿 一点
 - (六) 句集 勝田主計著 一冊
 - (七) 遺句集 勝田龍夫著外 七冊
- 第一回・第二回、計五十九点に上った。

このうち、「懐中日記」は綿密丹念に記載されており、正岡・藤野・柳原らと絶えず会合を重ね、寄席通い、ローンテニス、ベースボール遊びの記事など、頻繁に記されている。その二三例をあげよう。

明治二十一年三月十日(土) 晴

午後如水堂ヲ□ク。和田、御手洗、藤野、正岡ノ数氏会ス。夕、寄席ニ至ル。

同 六月二十五日(月) 晴

倫理、訳読ノ試験ヲ終ル。十二時ヨリ外出。新海氏ヲ峯月亭ニ訪ヒ、夫レヨリ本郷服部ニ至ル。正岡氏ト会シ、同伴シテ帰舎、ベースボールヲナス。夕、立原氏ト共ニコヒ一店ヲ叩ク。岐阜兄ヨリ端書来ル。

同 十一月四日(日) 午前九時ヨリ大雨ガ降り出シタ

柳原如水氏ニ用事アリ同氏ヲ訪ヒ、夫レヨリ正岡丈鬼氏ヲ本郷ニ訪フ。山崎、新海二氏アリ。少々質問スル所アリ。昼飯ヲ喫ス。雨ハ益々々々降リシキリ益々覆スノ勢アリ。四時帰舎ス。

柳原は明治十□年以後、なお「如水」と号していたこと、正岡は明治二十年「真砂の志良辺」九月号から「丈鬼」と号し、引き続き使用中であった。

同 十一月二十七日(火) 晴

午後三時ヨリ正岡氏ヲ訪ヒ午後八時頃迄談話、帰途夕食ヲ喫セントシテ囊中ヲ探ルニ一物ナシ。已ムヲ得ズ芥川兵氏

ヲ訪ヒ館パンノ饗心ニ預ル。九時半帰舎ス。

正岡を訪問し、五時間も談笑。帰途の貧書生ぶりを遺憾なく表現しているし、十二月四日には「昼間焼芋ノコンパニーヲ為ス」二十三日「夕勤工場ヲ見舞ヒコヒー店ニ至ル」など、学生としてのくつろぎの一面も記している。

明治二十二年二月五日(火)晴

(前略) 三時ヨリ正岡氏ト共ニ帝国大学ホールニ開会セル英語会ニ出席ス。ワルツ氏ノ批評等アリ。仲々面白シ。(略) 正岡とは屢々上野を散歩しているが、ベースボール会の記事は、十一月以降度々記載されるようになってゐる。

十一月十七日(日)晴

岐阜兄ニ封状出ス。午後竹村、正岡、戒田、新海等ノ諸子ト上野ニ至リベースボールヲナス。岩岡、迫田両氏モ会シ快ヲ極ム。四時帰舎。甚タ疲労セルヲ以テコヒー店ニ至リ一頓ス。

以上、とりあえずその会員諸兄とともに喜びをわかちたく、概略を報告します。

(平成四年二月例会講演) (会長)

編集の窓

— 著 作 —

正岡子規 — 創造の共同性 坪内稔典 リポポート発行 一、五四五円

海棠花 — 子規漢詩と漱石 — 飯田利行 柏書房 二、四〇〇円

平成三、一〇

子規の本意 伊志皓 近文社 六二ページ 近文社 平成四、二

— 雑 報 —

○NHK松山開局五〇周年記念「子規からの手紙」(ドラマ風ドキュメンタリー、如月小春作)が平成三年三月九日に放送された。

○子規記念博物館第23回特別企画展「柳原極堂 — 子規と共に —」が、四月二十八日より六月二日まで開催された。

○愛媛新聞短詩型文学賞俳句部門副賞に「越智二良賞」が設けられた(愛媛新聞平成三年八月二十五日「学芸」欄)。

○愛媛県文化振興財団発行の「文化愛媛」(平成三年十月一日)に、越智二良さんを偲んで(和田茂樹)が掲載された。

○子規記念博物館第24回特別企画展「子規から茂吉へ」が、十月十二日から十一月二十四日まで開催された。

○朝日新聞愛媛版(平成三年十一月三日)の「四国往還記」(早坂暁)に、「客観写生に宿る幼いころの風景」と題して、虚子が幼少期を過ごした「西の下」が紹介された。(25ページへ続く)

「不去庵記」について

足立修平

明治二十八年子規が松山へ帰っている時、霽月は井上要氏と共に子規を訪問している。その後一旦家に帰り、夜には漱石・虚子・極堂を伴って再び子規の家を訪れ、深夜に至る迄句会を催した事が霽月の日記に記されてある。霽月が井上要氏と既に明治二十八年に交友のあったことはこれにより判明しているが、その交友が俳句にも及んでいたかは不明である。その頃、松山において度々句筵を開いたことはよく知られているが、井上氏が同席したかどうかはなおしらべてみなければわからない。

政治家として国会・県会等で活躍した井上氏は、又経済界でも大いに活躍をされていたことは周知の通りである。その頃霽月は学業半ばでやむなく郷里に戻り、実業界に又文学の方面にも力を注いでいたのであった。

そこで、両氏はその向かう処を異にする部面もあるが、霽月は井上氏を県下第一等の実業家であると賞讃し、又井上氏は霽月を県下第一等の経済人としてたたえていたのである。

此の不去庵記に示されるように、井上要氏は、実業家として、その他諸般にわたる活動において、その御人格の立派であることは後世にまで消えることではない。

霽月は、長年にわたる親交により、井上氏の要請に応えて此の不去庵記をしたためたのであった。充分に云い尽くせない様子も言外にあるものの、霽月の性格として周到なる手記となっていることを評価したいものである。まことに心温まる友情ではある。其の時代の一面のうかがわれる一手記として諸兄弟に味わって頂きたいものである。

不去庵記

井上要君が去年還暦であつたと聞いた時、一寸意外な感じがした程君は若々しい精力気分と風采容貌の所有者である。質素な詰襟の服を着て、龜栗頭で、一種の愛嬌ある童顔に微笑を湛えて大洲弁の呀へた声で話さるる時は、どうしても還暦の人とは思はれぬのである。又君自身にも還暦を祝ふ等と云ふことは屑しとせず、壮年紳士を以て居らるる様であるが、伊予鉄道電気会社の多数の社員諸氏は、是非大々に社長の還暦の祝賀をしゃうといふことで、昨年来種々計画せられたが、其都度君は固辞謙拒せられたそうである。而も社員諸氏は其素志を翻へさず、一日最後の談判として君に対して、どうあつても初一念を貫徹すると云ふ決心を示されたので、君も其熱誠を感謝して終

に快諾せらるることになつたのである。但し条件として物質的には手軽くといふことで承諾せられたらうである。

さて実行方法としては種々懇談の末、君が予て高浜の別邸に書齋と応接所を兼ねた一室を建て増す必要を感じて居られた其計画を助けて之を達成することになり、今春来工を進めて頃日落成したのである。君は此記念すべき室の記を僕に囑せられたが、僕の無学不文なる絶対に辞退すべきである。而も態々来られての懇囑であり、平生別懇の間でもあり、旁々無慮慮に書いて見やうといふ気分になつたやうな次第である。

君の談によれば、此室の名を撰ぶべく先輩知己の方々へ懇囑せられて今迄に寄贈せられたのは、渋沢青淵子爵の「不去庵」、尾崎雪堂氏の「光風閣」、中橋狸庵氏の「満津の家」、空谷兵口内相の「有隣荘」、克堂若槻首相の「感誼亭」などであり、夫れ々皆結構な着想偶意であるが、君は其中に就て渋沢老子爵の不去庵を以て最も会心切なる訓誡の語であるとして第一に之を頂戴すると云つて居られる。蓋し不去の語は老子の「功成而不居、夫惟不居、是以不去」より出たものである。君は久しく政界に尽瘁し、又近年は専ら実業界に尽瘁せられて、夫れ々相当多大なる貢献をして居られるが、君は自ら其功に居らず、且つ老の至らんとするをも知らず、只々自彊不息、日も亦足らざる現状であるから、特に渋沢老の此命名を喜ばれたのであらう。

由来、君は蒲柳の質で、平生周到なる撰生と性来敏活なる氣

分とによりて能く健康を保ち、活動を続けて居らるのである。近来此高浜の山の上の別邸に居住せらるるも隠居安逸の爲でなく、一には曾て、伊予鉄道の陸海運輸連絡のために熱心劃策し、幾多の艱難障碍を排して此港湾の施設を完成し、松山の大小関たる今日あるに至らしめた深い思出のある此地に卜居し、且暮瀬戸の風光を俯瞰して当年を回顧し、不老の意気を鼓舞せんとする爲めであらうと思ふ。

且、此別邸と云ふも、嘗て君の参画せし松山商業銀行同僚の倶楽部たりし一棟の楼と、故賀田金三郎氏が時折此地に來遊する時の休息所に充つべく建てたる小さいビルディングの不用跡仕末を引受けて、此二つを一所にくつつけて拵へたまでの輕便質素なものであり、今度の応接室も必要止むを得ず建て添へたものである。畢竟君の質実主義其儘の表現である。

君の此主義、此氣分で將來、此室に且暮山海の清氣を呼吸し、内外日新の書卷に親しみ、時に知友珍客と談笑して益々健康を増進し、智徳を涵養し、常に自彊不息にして更に百歳の長寿を保ち、益々社業世務に尽瘁貢献せられんことは君の素志たるべく、又多教社員諸氏の熱誠なる好意に酬ひらる所以であると信ずるものである。

瀟の声涼しき朝餉夕餉哉

海門の明月真潮湛えけり

冬籠書中の師友皆不老

元日や児孫と遊ぶ好々爺

沖の声上り鯛曳く霞かな

大正十五年六月

村上 霽月

付記

井上要翁の社員に対する返礼の挨拶状の一節（「葉桜」大

正十五年七月号所載、伊豫鉄道電気株式会社編『井上要伝』

より転載。）

高浜の地は我が会社に於て蘆荻繁き一漁村を拓きたる所にて、その今日に至れるまでには実に惨憺たる苦心と努力を拂ひたる歴史あり。顧みて当時の社友各位が種々の迫害攻撃に堪へ、此事業に殉ぜられたる犠牲の結局が極めて平和なる海陸交通の要港となりたるに外ならず。小生居を此地にし朝に夕に此風物に接し此形勝に直面して実に感慨に堪へざる次第に御座候。然るに今日更らに各位より記念の一室を建設相成り、恰も各位と相接するの感を以て日常坐臥相親み且つ永く之を傳ふることを得るは欣懐の至に御座候。依て小生は年來尊敬せる各先輩に対して此感激を訴へ候処、濫沢老子爵は此の一室を「不去庵」と命名して訓誡せらるる所あり、其他の名流亦共鳴して寄與せらるるもの多く望外の幸慶に浴することと相成候。

（平成四年二月例会資料）（幹事）

（22ページよりつづく）

○子規記念博物館新春特別展「楞堂・一茶とその周辺」が、平成四年一月一日より二十六日まで開催された。

○愛媛新聞（平成四年一月一日）に、山口誓子の「子規の俳句」が掲載された。

○平成四年一月三十一日、子規の友人勝田主計の日記・手帳などの資料が、四男龍夫氏のお志により子規博に寄贈された。

○二月、和田茂樹会長宅の玄関前の庭に、子規の句碑「温泉の町を取り巻く柿の小山哉」が建てられた。この句は、散策集の「柿の木にとりまかれたる温泉哉」を改作したもので、「寒山落木」の子規の筆蹟によっている。

○平成四年三月八日のNHK学園松山短歌大会に、「世の光の人―正岡子規と土屋文明」と題する宮地伸一氏の講演があった。

論 文

正岡子規と海南新聞の松風会俳句 和田克司 大阪成蹊女子短大研

究紀要27号

正岡子規と海南新聞の俳句 和田克司 同27号

河東碧梧桐と子規1〜6 村尾清一 「花鳥諷詠」 平成三、五

一〇

正岡子規とその周辺29〜40 梶中じゅん 「杜鵑花」平成三、五

四、三

子規の上京まで7〜10 小林高寿 「杜鵑花」平成三、五

越智二良遺稿集補遺(二)

タルトと定行公

松山名物のタルトは久松家初代の定行公が長崎から伝えたというのが、このころは定説になって、タルト屋の広告はみなそう書いている。これは景浦稚桃先生が戦前百華堂の請いを入れて書かれた「タルト考」の中に、定行公が正保元年正月八日長崎探題に任せられ長く彼地に留まっていたので、長崎輸入の蜜製菓子タルトの類も当時定行公によって松山へ伝えられたのではあるまいかと書かれたのによるものと思われる。定行公が伝えたというのは単なる推定で、稚桃先生も「今これを確然と徴証すべき文献のないのは返す返すも遺憾な次第である」と断っていられるが、然し、極めて妥当な、確率の多い推定であるから、先生が謙虚に「伝えられたのではあるまいか」と書いていられるものがいつか「伝えられた」となってしまうわけである。

タルトに関する松山の文献は、柳原多美雄先生の考証によると文政のもの最古とされていた、ところが最近先生から承ったところによると、元禄年間松山に井筒屋という菓子屋があって、これが千宗庵様お好みにより「タルト」六十本を製造する。製法はおやじ様伝授によるというような意味のことを書いた古い文書が発見された

そうである。宗庵は京都千家の人で定行公の茶の先生だったそうである。だから六十本もタルトを注文したのは、どうせ殿様を正客とした茶会であろうし、宗庵様お好みとあっても、恐らくは殿様の御好物であったのであろう。よしそうでないとしても、定行公の存中に、その茶の師匠がタルトを作らせたという記録があるとすれば、ここにタルトと定行公との関係は一層密接になり、稚桃先生の推定が文献的にも立証されたことになるわけである。

タルトをポルトガル語でタルタといい、紅毛雑話(天明七年)や長崎土産(弘化四年版)にはタルタとあることは、私が曾て伊予史談で発表したところである。(『随筆集』昭和三一、一一二)

丹生谷翁のこと

総選挙がある度に私の思い出すのは丹生谷亮之進翁のことである。もう翁の名前を記憶している人も稀れであろう。明治三十年代か、総選挙といえば翁は必ず立候補して、いつも数十票——恐らく百票を越えたことはないのであるまいか——で、いつも落選して話題を賑わした、名物男である。

どういふ縁故からか、私の少年時代翁は始終私の家を訪ねて来た。

体格の大きな人で、日に焼けて色の黒い顔に大きな目玉がギョロリと——しかし鋭くはない、穏やかな眼光であった——いかにも魁偉といった容貌で、何となく博多東公園の日蓮上人の銅像を連想させた。容貌に似ず柔和な人で、私など大きな膝によく抱かれたものである。いつも色の褪せた羊羹色の紋付羽織を着ていた。翁は篤農家として知られていたが、翁自身は温泉郡荏原村東方の旧庄屋であったのに、翁の代になって没落したのだからこの篤農はどうやら怪しいようにも思えるが、一般農民のために家財を蕩尽して顧みぬといった人だったのであるまいか。後年私が出で東方小学校の代用教員になった時、旧校舎の敷地が丹生谷家の屋敷跡だということを知った。校庭のまん中に柿の木が一本残っていた。

翁が衆議院選挙に立候補する動機は、勿論一片耽々の気、無産者政党などない時代に農民代表として立つ気概からではあったが、私の聞くところでは、翁の妻女は大和吉野の山林王として知られた土倉家の一族から嫁いで来た人で、実家では本家へ対してもせめて娘婿が代議士くらいにはなってくれぬと困るというので、運動費なども細君の実家から貢がれるのだという噂があった。翁が零落して小野村水泥に住んでいたころ、お祭りに来なさいとしきりに勧めるものだから、やはり小学生である兄と二人で行ったことがある。平井駅から川を渡って行った藪かげの家であった。ところが案内をしておきながら翁は不在で、留守をしていた妻女が大あわてで炮烙で玉子の落し焼をしてくれた。それが唯一つの御馳走で、祭りというのに餅もつかず酢もつけてない有様であった。妻女は色の白い柔和な

美しい人であった。

年代はよく覚えぬが、稲の正条植がはじまったころ、旧習に慣れた農家では反対するものが多かったが、翁は急先鋒になって猛烈に反対熱を煽って回った。後年田中蛙堂翁は「丹生谷翁は稲の正条植を奨励した功労者だ」と話していたが、これは蛙堂翁の記憶違いである。しかし、丹生谷翁自身が後になって「自分が反対したのは農家に正条植を認識させるのが目的で、正条植がよいことは自分は百も承知していたのだ。しかし、頭から正条植がよいといったのでは頭の古い百姓は反撥するばかりだ。自分が反対したことによって農家の注意を喚起し、あんなに早く普及を見たのだ」と語っていた。結果論からいえばそれも一理ある話で、負け惜しみの小理屈か、真意であったかは知る由もない。ただ農民の味方になって家を外にして寝食を忘れるといった気概はたしかにあった。「偉大なる凡人」といった感じの人であった。

それだけに家族は苦勞していた。大正のはじめの頃は松山市内に住んで相変らず窮乏の生活をしていた。多くの子女があり、長男は才賀藤吉翁の恩顧を受けて電気界に入ったが、大正七年私は松山を去ったのでその後の消息を知らず、翁の没年さえも知らぬ。ただ先年、俳人渡部渡月氏の夫人が翁の娘さんだということを渡月氏自身から聞いたが、その渡月氏も亡くなったそうである。

(「愛媛タイムス」昭和三三、六、一六)

若き日の中西悟堂氏

「小鳥と遊ぶ中西悟堂氏」—— 堤さんの興味ふかい訪問記を読んでいるうちに、私はいろいろのことを思い出した。

私が二年余勤めた海南新聞社から愛媛新報社に転じたのは大正四年の春で、同七年三月まで在職したから、その間のことである。中西悟堂氏は、同じく後に詩人歌人として知られた赤松月船氏とともに、当時の新居郡角野の瑞応寺の僧堂で修業していた。そして時々愛媛新聞の読者文芸欄へ投稿していたのであろう。年も月もわからず、春であったか秋だったかも覚えぬが、ある日の夕方、両氏は連れ立って愛媛新報社へ私を訪ねて来た。

愛媛新報社は県下で最初に輪転機を備え、夕刊を発行し、発行部数も最も多かった。湊町四丁目、円光寺の東に三層洋館の社室があった。階下は営業部で編集室は階上にあつた。社長は高須峯造氏、主筆は御手洗忠孝氏（のちに松山市長）、編集長は中野天城氏で夕刊四ページを編集し、私は二ページの朝刊を編集していた。記者は元老格の野本氏久（東陽）、宮内保之進（鶯眠）、田中助治（涙月）、校正兼務の岩崎矮松、校正大西、ほかに吉杖久徳氏は広島新聞社を通じて来る通信社ダネの電話の筆記（速記にあらず）専門であつた。夕刊は一時か二時ごろ締切って刷り出すと、午後の取材活動はほとんど停止する。朝刊は私と電話係の吉杖氏と校正の三人だけ、それも七時か八時には締切るといふ、まことにのきなな時代であつた。

大正五年か六年の春、慶応大学新聞科を出たばかりで無経験の田

坂隼三、稲田康雄（のち兵頭）両君が、編集長の中野氏よりも高給で迎えられた（高須社長の長男で野球選手として有名な一雄氏が慶大に在学した関係からか）ことからストライキを起し、中野・宮内・田中・岩崎君らが退社した。その後は朝夕刊六ページを私一人で編集するようになった。中西氏らの来社されたのはいつごろであつたらうか。

編集局に通じる階段は狭かつた。社外の人では伊予鉄社長であつた井上要氏が時々これを上がつて来て原稿を書いた。森直大外氏も一、二度来た。高浜虚子氏も令兄池内政忠氏の病氣見舞いに帰省して御宝町の家に滞在中、一日御手洗氏を訪ねてこの狭い階段をあがつて来たことがある。御手洗氏が原稿を頼むと気軽に引きうけて書いてくれた。柿を主題にした短い文章であつたと思う。

中西・赤松の両氏は、うす暗い階段を上がつて来た。二人とも黒い法衣を着てわらじばき、網代笠を携えた雲水姿であつた。中西氏は明治二十八年十一月生れで私より四歳の年少であり、赤松氏も同年配であるから、当時は二十歳前後であつたらう。

編集室の一隅に洋風の応接室があつて、そこで話したように思うが、もう日が暮れて暗いのに、なぜか電灯がついていなかったように記憶する。

工場にはもとより輪転機印刷の動力線が引かれていたが、編集室は夜間の電灯線だけであつたのであろうか。地方新聞にさきかけて写真部を設け、岡山山陽新聞社にいた寺崎一雄君が、中川という少年（のちに四国電力の技術者になつた）を相手に、出写のカメラ

マンと、現像焼付けから製版まで一人でやっていた。海南、伊予日々の両社は千船町の広藤印刷店へ製判をたのんでいた。写真のガラス湿板から銅板へ焼きつけるのにも(当時は亜鉛板を使うことを知らなかった)専ら太陽光線によつていたから、雨天の時にはひまがかかった。だから昼間の電灯線はなかったのである。

せっかく訪ねて来られても、これといった話題もなく、またこうした行脚の僧を接待する道もわきまえず、朝刊編集の仕事をかえていたので、わずかな時間話しあつたばかりで、私はこの二人の若い雲水を、あつげなく夕暮の町に送り出した。ただそれだけのことで、両氏が後年高名な詩人、歌人になられようなど思いもよらなかった。

中西氏は歌詩人としてより野鳥研究の第一人者として有名であり、放送にもしばしば出られるので、早くから何度も声は聞いていたし、テレビでは最近にもNHKのわたしの健康やRNBの婦人ニュースなどでお目にかかった。赤松月船氏は、郷里の岡山県で村長をしているとかいふ噂を聞いたことがあるが、数年前NHKラジオの朝の訪問かで、兵庫県の山中の何とかいふ寺の住職をしているとかで、談話が放送されたのを聞いた。大洲の村井幽果氏あたりは、いまま文通していられるのではないかと思う。

堤さんの訪問記を読んで、もう五十年も昔の、お互いに若かつたころのことを思い出したのだが、中西氏も赤松氏も、そんなことをいまでも覚えていられるかどうか。

(「愛媛タイムス」昭和四〇、一)

わすれなぐさ

五月四日の朝、松山へ出たついでにタイムス社をのぞくと、居合わせた久保正弥君が、「けさの朝日新聞にあなたのこと載っていますよ」という。みると「読書」欄に、「選句通じて父を語る」と題して梶野立子編「虚子一日一句」が紹介されているあとに、「编者との一時間」という立子さんの訪問記がのつている。その末尾に「この本は昭和三十年ころ朝日新聞の愛媛版に連載された越智二良氏編『子規歳時』にヒントを得た体裁だ」という一句が添えてあった。

『虚子一日一句』はその以前、朝日新聞社の上野精一氏から、私の前著に似ているというので贈って頂いていた。その後あちこちの友人から新聞で君の名を見たという通信があつた。その中で最もうれしかったのは、『子規歳時』を出版してくれた、当時の朝日松山支局長田村薫氏から、いろいろの資料を送られたことであつた。最初の製本見本や、挿入したカットに関する田中宗坦師の手紙や、私から田村氏に送った手紙など、同氏はゴールデン・ウィークの一日をつぶして探し出してくれたとのことであるが、それにしても、松山から大阪本社、浦和支局から東京本社へと再三転動しているのに、よくもこのような十年も前の古い断簡の類を、捨てもせず保存しておいてくれたものだ。これには私は大いに敬服するとともに教訓をうけた。

その中に柳原極堂翁から私に宛てた半紙一枚の手紙があつた。

お手数かけ多謝いたします。序文の終りに添へる俳句なか
出来ません。先刻黙禪先生にも相談して左記に定めました。拙句
なれど是にて御間に合はしてくださいませ。

勿忘艸小鉢に分けて三百六十五

わすれなくさは春季にて紫色の小花をつける艸です。「勿忘草小
さく咲きぬ妹が許」とかいう鬼城の句もあり、小さなゆかしい草
花であります。

そして勿忘艸の艸のところに線を引いて「草の字の方よからん」
と訂正してある。三十一年一月十九日付である。文面に署名はない
けれど、思いがけない記念なので、表装して額に仕立てようかと思
っている。

『子規歳時』は当時高浜虚子翁が『虚子俳話』の中で親切に紹介
して下さったため、全国から注文が来て売り切れてしまった。私が
もらっていた二十冊ばかりも、その後各地の希望者に無代で進呈し
て手許にはただ一冊残っているばかりだが、いまに時々『虚子俳話』
を読んだ人から問い合わせがくる。進呈した人々のうち埼玉県熊谷
市の宮崎利秀、高知県吾川郡の橋田恵明、東京都太田区の額田無繻
の諸氏は、十年後の今も年賀状を絶やさず、とくに額田氏はほとん
ど毎月通信を寄せられ、今年一月には夫妻してはるばる松山に私を
訪ねてくれた。多くの人が一兩年で絶えた中にこうした人たちのあ
ることも私には一つの教訓である。

田村氏へはあらためて深い感謝のたよりをしたことである。

(「愛媛タイムス」昭和四〇、五、二四)

逝けるコンピョウさん

—— 念願の子規野球の碑 ——

「球を逐いつ球に逐われたまの世を終りて永久に靈石のした」
という辞世を残して、近藤兵太郎さんが五月十九日に七十七歳で、
死去した。「コンピョウさん」と愛称され地方球界で知らぬ人もな
かったが、単に名物男とか生き字引とかいうだけでは当たらない。こ
の人が野球、とくに学生野球に注いだ情熱と気魄、そしてその及ぼ
した無形の感化は大きいものがあったと思う。

私は野球の門外漢で、藤本定義、森茂氏その他日本プロ球界の多
くの人材が、直接間接、近藤さんの^{かたが}鉗錐をうけ、その膝下から東立
ったということ、晩年まで愛大や新田高校のコーチに当って、ここ
でもこの人独得の訓練ぶりを発揮したことくらいしか知らないが、
近藤さんは松商で私の一年先輩で、早くから親しくし、途上であえ
ば必ずしづばらくは立話をかわす仲であった。誰も知るとおり近藤
さんは松商第一期の選手であるが、近藤さんらが最上級になった当
時、野球部費を多く分捕るのに君が適任だからと、野球を知らぬ私
をむりやり委員にひっぱり出したのが近藤さんである。それ以来、
近藤さんは卒業後もひまさえあれば、ないひまを無理につくっても
母校へ来て、頼まれせぬ練習を監督しきびしく激励してくれた。
明治四十一年の秋西条へ遠征した時にも、いっしょに桜三里を徹夜
で歩いてついて来てくれた。いまとちがって選手にすることを親が
さらって、野球をやめさせようとする。その家庭を訪問して説得す
る役も近藤さんが引き受けてくれた。

私は松商卒業後しばらく近藤さんの消息も知らなかったが、大正八年の夏松商がはじめて四国代表になって全国大会に出場した時、鳴尾球場ではからずも久しぶりに出会った。私は朝日新聞地方版の記事を書くために行ったのだが、たしか敏懸さんもいたと思うから近藤さんは相変らず頼まれもせぬのについて来たのであろう。

近藤さんはその後台湾へ渡り、したしく育て上げ監督する嘉義農林が甲子園へ出場した。高砂族をまじえた異色のチームで、これがゆくりなくも母校松商と顔を合わせ延長戦の末5-4で松商が勝った。昭和十年松商が全国初優勝の年である。近藤さんは泣き笑いをしたことであろう。

近藤さんは学生野球があまりに技術に偏重し、精神を忘れ魂を失っていることをいつも歎いていた。飛田穂州氏に通じるものがあった。正岡子規の野球の碑を堀の内あたりに建てたいというのが近藤さん「最後の唯一の念願」であった。私はこれを聞いて昭和三十三年七月二日の愛媛新聞スポーツ欄に「子規と野球の碑」と題する一文を書いた。それにも書いたように、近藤さんは自ら先に立つて推進することは遠慮したいといていた。恐らく近藤さんの「顔」をもってすれば、プロ野球方面からでも相当の資金が得られるのでないかと思うが、近藤さんは情実がすがるて援助を求めることなど、いさぎよしとしない、この人の潔癖性によるものであろう。今年の子規生誕百年、何とかして実現したいものということを年賀状の端に書いたことであつた。

ちきごろNHKローカルテレビ番組「愛媛の百年」で「野球事は

じめ」をとり上げることになり近藤さんをゲストに推薦したのだが、その録画は三月下旬で、近藤さんはすでにホジキン氏病で入院中であつたらしい。代つて出演された内子の佐野熊翁医博は八十五歳で、近藤さんよりさらに古い先輩だが、同博士は奇しくも台湾の嘉義に在任していて、近藤さんとも懇意であつたと語つていられた。この番組は近藤さんがなくなつて間もない五月二十四日に放送されたが、つつしんで近藤さんの死をいたむ旨の字幕がとくに挿入された。

過日野球史を研究している図書館の村瀬氏に会つたら「近藤さんのお元氣な間にまとめておきたかつた」と惜しんでいた。ほんとうに生きた野球史ともいべき惜しい人であつた。

(「愛媛タイムス」昭和四一、六、一三)

大本演一氏のこと

美しい冬晴れの日曜の朝、道後祝谷の松山神社に虚子翁の句碑が立ち、除幕式があるので出かけようとしているところへ郵便が来た。その中に思ひかけぬ一枚のがきがあつた。

「謹啓 夫演一儀死去に際しましては……」云々という豊主大本カズエさんから「生前の御厚誼に對し重ねてお礼申し上げます」というあいさつである。びっくりした。私は全然知らなかつたのである。知らなかつたから驚いたのであるが、実は私はさきころ、なにということなしに大本演一氏のことを気になつて近況うかがいののがきを出したばかりであつた。四十九日忌は十九日に営んだとあるから、私のはがきは死後に届いたことであらう。

大本演一氏と私とはほとんど面識もない仲である。戦後もう十年ばかりも前になろうか。書店を廃業して錦耕社という喫茶店を大街道新栄座近くの階上に開いていられたころ、「きんこうしゃ」という小型の雑誌を出した。これはいまの「松山百点」などと同じ型式で、その先駆をなすものであった。大学の教授、財界人、新聞や放送関係の人など、文化人の随筆を集めたものであった。私も頼まれて短い駄文を書いた。これが大本氏と交渉を持った最初で、大本氏からはていような礼状と「山黄金」とかいふ同氏創製の菓子を贈られた。

一両度もらったたよりで朝日新聞最初の婦人記者大本花代さんが演一氏の叔母さんだということを知った。花代さんは私が朝日に入社した大正七年にはすでにやめていられたが、大正御大典に活躍されたことなど聞いていた。

「きんこうしゃ」という雑誌は三号か四号か短命で終った。大本氏はこの雑誌に愛着をもち、機を見て復活したい気持であつたらしいが、私との文通も廃刊とともに絶えてしまった。ところが昨年の暮であつたか今年のはじめであつたか、突然大本氏からはがきをもらつた。日赤病院に入院してもうかなり長く闘病生活をつづけているということであつた。病床でふと私のことを思い出されたのである。すぐ返事を出したけれど、そのまままた長い間ごぶさたに過ぎていたのに、最近ふいと大本氏はどうしていられるかと気になつ

てはがきを書いたのである。虫が知らせるとでもいうのであろうか。しかし、私のはがきは大本氏には読んでもらえなかつたのである。

こんな悲しいお返事が来ようとは夢にも思ひかけなかつた。

(「愛媛タイムス」昭和四二、一二、四)

子規会報 五四号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成四年七月十九日

発行 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

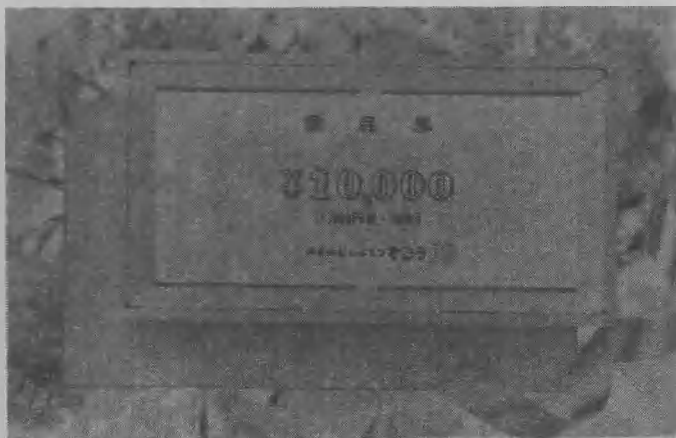
郵便振替 徳島二一八六八

柳 松山市東長戸二丁目一三九

印刷所

青

先さまに お買物の楽しさを贈ります



いよてつそごうの 商品券

贈られた方の思い通りに姿を変える自由自在ギフト
全国のそごう各店で好きなときに
ご利用いただけるうれしい贈りものです
500円券から10万円券まで10種類ございます
ご希望の枚数をセッいたします
ご予算にあわせてお選びくださいませ

※ご利用の際、消費税は別途お支払いくださいませ
箱代は別途頂戴いたします

■ご用命は1階商品券売場・いよてつそごう各店で承っております

いよてつそごうのネットワーク

- | | | | |
|-------------------------|---------------------------|---------------------------|-------------------------|
| ●川之江店
☎(0896)58-6658 | ●伊予三島店
☎(0896)24-4612 | ●新居浜店
☎(0897)33-9732 | ●西条店
☎(0897)56-1430 |
| ●東予店
☎(0898)65-4385 | ●今治店
☎(0898)31-0240 | ●大洲店
☎(0893)23-5255 | ●八幡浜店
☎(0894)23-1001 |
| ●宇和店
☎(0894)62-5258 | ●宇和島店
☎(0895)23-0022 | ●サンパール店
☎(0895)72-5654 | ●宿毛店
☎(0880)63-4682 |
| ●高知店
☎(0888)73-1177 | お近くのいよてつそごうをお気軽にご利用くださいませ | | |



いよてつ
そごう

松山・市駅

火曜日定休

☎(0899)48-2111<代>

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

巴堂本舗

TEL 0899 (41) 3452

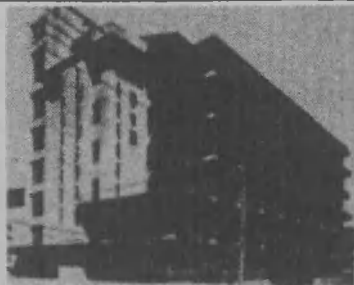
会議・御会食をホテル春日園へ
四季の移り変わりを楽しめる露天
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1
☎(0899)41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく
くつろぎのときに情緒ひとしお

第7回愛媛出版文化賞受賞

『一洵がゆく』 好評発売中!

B6判 212頁 定価 1,600円

自費出版

お気軽にご相談下さい。
編集からお手伝いさせていただきます。



印刷 & 出版 (有) 青葉図書

〒790 松山市小栗6丁目3-23 ☎(0899)43-1165

¥300